

第一編 名蔵湾保護水面調査

渡辺利明、勝俣亜生

昭和56年4月～昭和57年6月

本調査は、名蔵湾藻場保護水面管理事業の一環として実施したものであり、詳細は「昭和56年度名蔵湾保護水面調査報告（藻場）」に報告したので、ここでは要約を示す。

- (1) 分株して増えるという栄養生殖が重要な増殖法であると考えられるリュウキュウスガモとリュウキュウアマモの生育密度の季節変化を、現場に方形枠を設置し同一場所の株数の変化を観察する方法で調べた。今回の調査では、リュウキュウスガモ・リュウキュウアマモの両種とも季節的な変化は明らかではなかった。今後、より精密な調査が必要であろう。
- (2) 植物食性魚類の重要な餌料と考えられる海草に付着する藻類の種組成及び量について調べた。現在までのところ藍藻8種、緑藻5種、褐藻8種、紅藻22種の計43種が同定された。また付着藻の量的変化は、春に多く夏から初秋まで減少し以後徐々に増加する傾向を示した。
- (3) 1981年6月8日から13日までの5日間、桁網漁獲試験を実施した。期間中の全漁獲物は47種、420個体、287.5kgであった。主要な漁獲物は、ゴマアイゴ、モンツキアカヒメジ、オキザヨリなどであった。特に今回は、ゴマアイゴが203尾、193.3kgと大量に漁獲されたが、これらの生殖腺は雌雄ともによく発達していた。
- (4) 1981年4月、5月、6月に実施した幼魚・小型魚対象の刺網漁獲試験結果と1980年4月から1981年6月までの刺網漁獲試験漁獲物の食性をとりまとめた。出現した101種のうち72種について食性がほぼ推定でき、底生動物食性魚39種、植物食性魚16種、魚食性魚8種、雑食性魚6種、プランクトン食性魚3種であった。
- (5) 1981年6月18日、保護水面内の藻場で底生動物の採集を行なった。前年度同時期と同様に多毛類と端脚類の個体数が多かった。また、刺網漁獲試験と底生動物調査で採集した短尾類について種の査定を行なった。出現種数は27であったが、そのうちトゲイソクズガニ、イッカクガニ、コワタクズガニ等が多く採集された。
- (6) 1981年4月16日にフィルム魚礁24個を水深約15mの砂泥底に設置した。また同年11月9日には1.5m角型コンクリート魚礁32個をフィルム魚礁と隣接する水深約13mの砂泥底に設置した。フィルム魚礁にはスズメダイ類・イシモチ類・ハタンボ類幼魚が蟄集していた。1.5m角型魚礁は魚類の少なくなる水温下降期に設置したため、まだ蟄集魚は少ないが、水温の上昇とともに魚類が集まってくると期待される。
- (7) 1981年7月25日、11月18日、1982年1月18日の3回、保護水面内の2地点で水質調査を行なった。